

舞踊における動きのリズムについて 第2報

—リズム反応テスト—

西 谷 怜 子

I はじめに

舞踊創作においてその芸術的価値は、創作者の内的真実や主観的生命を身体の動きにより客観化させることにある。その過程は、身体運動、リズム、空間、等の要因が美的形成要因と関係しながら、それぞれ個々の動きを持ちつつ、しかも独立した部分でなく互いに関連し合うことにより進められる。そして、全体は時間の流れにそって結合、統合されながら創作者独自の生命のあらわれとしてまとめられる。ゆえに舞踊作品は、創作者自身の身体を媒体としながら時空的に形象化される個の表出であり、これが舞踊の特色と言えよう。S. K. Langer は、これら要因（身体運動、リズム、空間、美的形成）の有機的構成のされかたを舞踊創作技法と呼んでいる。身体を媒体とするその活動において、身体運動は、自然運動の意識化された意欲的な働きかけによるものとする。このことから、人間に内在する自然発生的リズム、および、発育発達にとまなう経験により体得する身体運動や、リズムについての実態を知り体系化することは、教育活動において必須の条件と思われる。しかし、未だ舞踊の研究においては未開拓である。そこで筆者は、時間要因をとり上げ、その普遍的特性、あるいは体系について明確化することを目的とし、数年にわたり、リズム反応テストを条件とする実態分析を、動作時間研究法により進めている。舞踊における動きのリズムは、音楽のそれと異なるとの考えから、動きの立場におけるリズムの類型化を行ない、第22回日本体育学会において報告した。本研究は、この類型を基とし、さらに運動構造との関連において年令別発達段階による動きのリズムの考察を行ない、体系化への接近を試みながら、舞踊創作における正しいリズム指導の一資料を得ることを目的とし進めるものである。

II 研究の方法

1. テストの方法

被験者に刺激リズムを与え、即興によるリズム反応テストを行ない、V.T.Rに収録したのち、再現方式をとりつつ時間系列より動作を分析記録した。

2. 刺激リズム選択

刺激として用いたリズムは第1表に示す。前報（研究紀要第16号）における音楽のリズムと動きのリズムとの比較の結果、差が見られたのは主として休符の位置、および、シンコーションの形であった。このことから、前報までに得た動きのリズムより、頻数の多いものから主としてアクセントのあるものを中心に選択した。

3. テストの期日、対象

(1) 期日、昭和47年3月

(2) 対象、岡山市南方幼稚園5才、岡山大学附属小学校2年、5年、岡山市御南中学校2年、真備高等学校2年、岡山県立短期大学体育科2年、各女子について、ダンス評価上位の者20名ずつ。

Ⅲ 結果と考察

1. 刺激反応テスト結果

刺激リズム通りに反応した結果は第1表に示す。この結果、年齢別には、小5がもっともよく合わせ、5才、小2については皆無であった。リズム別には、3、4、7、についてのみ合わせ、他のリズムは合わせにくいものようである。

第1表 刺激反応テスト結果(%)

刺激種類	刺激リズム	年齢	5才	小2	小5	中2	高2	大	計
ハ-a	1	♪♪♪♪♪	0	0	0	0	0	0	0
ハ-c	2	♪♪.	0	0	0	0	0	0	0
ニ	3	d d♪	0	0	1.8	0.3	0.6	1.0	0.7
ホ-a	4	♪♪♪♪	0	0	2.8	0.7	1.1	0.6	1.0
ホ-d	5	♪♪♪♪♪	0	0	0	0	0	0	0
ヘ-d	6	♪♪♪♪.	0	0	0	0	0	0	0
ト-a	7	♪♪♪	0	0	2.1	0.1	0	1.5	0.7
ト-d	8	♪.♪.♪♪	0	0	0	0	0	0	0
計			0	0	6.7	1.0	1.8	3.1	2.3

註、リズム分類は第2表参照。

2. テストにより得た動きのリズム

刺激リズム通りに反応しないものについて観察結果を分類別に考察する。その頻数については第2表に、百分率については、第2表および第1図に示す。

(1) 年齢別考察

5才、リズムの種類がきわめて少なく、動きも限られている。四肢による単独リズムが多い。

小2、リズムの種類は、5才に比して増え、上下肢同時の単独リズムが多い。

小5、リズムの種類が増え、頻数の分布に片寄りが無い。脚のみの単独リズムが多く、パターン内で動きの組み合わせが見られる。

中2、リズムの種類が多く、1リズムに対し、各種の動きが見られ、また、複合リズムが増える。

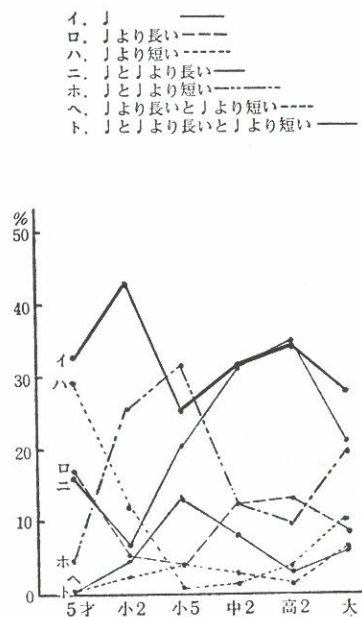
高2、リズムの種類は、中2に比して整理され、身体各部での複合が目立つ。リズム、動きともに規格化されて見える。

大学、リズムの種類が大変多く、身体各部による複合リズムで、複雑、かつ多様な動きである。

(2) 分類別考察



全体的に頻数の順を見ると、イ、ニ、ホ、ロ、ハ、ト、へ、であり、前報のテスト結




第1図 動きのリズム分類別プロフィール



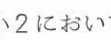





果，イ，ロ，ハ，ニ，ホ，ヘ，ト，の順であったのに比して異なった結果が見られた。しかし，その内容についての傾向は大差なく，うち，ホ，ト，について休符の入り方の変動が目立ち，他のイ，ロ，ハ，ニ，ヘ，については，頻数の増減による差がほとんどであった。また，各年令において頻数の多いリズムは，前回と同様なリズムであり，これらはそれぞれの年令に定着されたものと考えたい。このことについて次項で述べる。

(3) 頻数の多いリズム

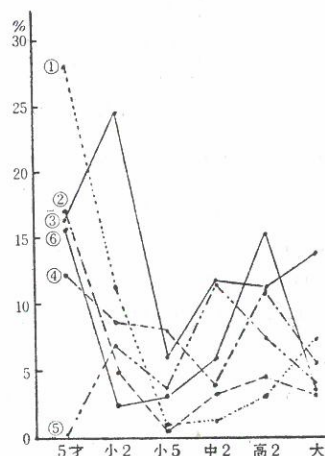
①  5才でもっとも多く27.9%を占め，この動きは，ウォーク，ランニングで，ほとんど単独リズムである。これは，小2で11.2%まで減少，小5でさらに1%まで減少し，中2から再びわずかに上昇，高2，大学と順次増加している。このことは，年少における歩，走の動きが，中2から  を含むリズム等に移行し，このリズムはフォローの動きに置き換えられるためである。そして，中2では単独リズム，高2，大学では身体各部による複合リズムの形で見られる。

②  5才において17.03%を占め，腕の動きによる単独リズムとして多く見られる。小2では，腕の動きによる単独リズムで，4.1%に減少し，さらに小5においては，0.5%まで減少し消滅の形をとる。中2，高2，大学では，体重移動，膝屈伸，胴体の動きとして，複合リズムにより，3%～4%の範囲で安定して見られる。これは，5才における腕のみの動きが小2から減少，小5で消滅し，両足とび等跳躍の動き（,  など）に移行し，中2になると，新たに胴体の極限までの運動として見られ，高2，大学において，多様な身体運動として見られるためである。


③  各年令とも頻数が多く位置するリズムで，ことに小2においては，24.7%を占めている。これは，5才におけるウォーク，ランニング等の  のリズムが，小2において  に移行したものと，両足とびが多く見られる関係である。小5では，このリズムは，ランニングや，両足とびと足ふみ等組み合わせの形で見られ，中2では，単独リズムと複合リズムが同程度で，ホップ，ショティシュ，など動きの種類が増加する。高2では，単独リズムがかなり多いが，脚上挙，ピルエット等動きの種類が多様になり，大学では，単独リズムを残しつつ，その種類はさらに多様化している。動きの多様さと，リズム頻数の多いことから，このリズムは動きの基本の形をあらわしていると思われる。


④  小5に特徴を持ち，7.9%を占めるリズムであり，両足とび，しゃがんで両足とび等この年令でもっとも多い動きとして見られる。これは，5才から両足とびとして見られるが，未だ完成した動きでなく，はじめの  で膝を曲げて準備，あとの  で跳ぶ形，すなわち，1パターンで1回の両足とびを行なうわけである。小2になると，1パター

第2図 リズム別発達曲線



ンのリズムで2回できるようになる。また、体前屈起きる、等の動きも見られる。小5で両足とびとしてピークの姿を見せながら、中2においては消滅し、ウォークとしてのみ見られる。高2では、脚、胴体、ウォーク等、多様な動きとして11.3%見られ、大学では、ポーズ、胴体の運動等で主としてアクセントを感じさせるものである。

⑤  運動のパターンを止めるものや、休むものとして見られるもので、5才では0.4%と僅かしかなく、小2、小5ではウォークをしてとまる、ランニングをしてとまる、片足とびをしてとまる(けんけんパー)等に限られる。中2では、ウォーク、ポップ、腕、胴体、等各種の動きのあと止まって区切りをつける形で多く見られ、高2では、さらに多様な動きで区切りをつける形として見られる。大学では、そのほとんどがポーズできめる形である。

⑥  5才で頻数多く、15.6%を占め、小2(2.3%)、小5(3.0%)では少なく、中2(5.9%)でやや増え、高2(15.2%)では急増し、大学(3.15%)で減少している。これは、5才、小2、小5では、リズムに合わせようと拍子の頭のみ動き、あとは待つために生じるリズムであり、中2、高2、大学では、ポーズをきめるものと、アクセントづくりのものが同程度である。


以上、各年令に定着していると思われるリズムにおける成長曲線について考察すると、次のことが得られた。未分化な幼児の段階でのリズムは、身体発達に伴い一応消滅、脱皮し、異なった形で伸びるものや、小学朝に移行の時期を持ち、異なったリズムに置き換えながら成長するもの等周期を持ち、交錯しつつ発達するようである。

(4) アクセントの年令別考察

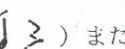
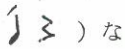
5才、等分されたリズムの頭にアクセントのあるもので、上下肢の動きによるもののみ。


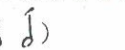


小2、5才と同様なものに加えて、形としてはシンコペーションのリズムが見られるが、力の強弱が伴わないため、アクセントとして感じられない。

小5、等分されたリズムの頭にアクセントのあるものに加えて、シンコペーションでのアクセントが見られる。この動きは、とびこむ、追歩、などが多く、そのほとんどは単独リズムである。

中2、長いリズム(○, ↓)などの動きはじめや、終わりにアクセントのあるものが見られる。例えば、ターン、腕回旋等。

高2、さらに休符によるアクセントづくりが見られる。例えば、脚上挙、腕を伸ばす() また、動きをとめてアクセントとするもの(↓ ) など。

大学、さらに、運動を大きく行なうためにアクセントを感じさせるもの() が多く見られる。動きは、脚回旋、ターン、胴体の運動などによる。また、運動の準備相から主位相への移行のアクセントが多く見られる。(↓ )

(5) シンコペーション

分類ト、にもっとも多く、ヘ、ホにもかなり見られ、ハは僅かである。年令別には5才から僅かではあるが見られ、小5、大学に多く見られた。これは、5才、小2、小5においては、とびこむ、追歩など、単独リズムで、中学では、ウォーク、脚上挙、ホップ等、身体各部の複

合リズムである。高2では、ウォーク・ターン、フォロー・ポーズ、など複合リズム。大学ではすべて複合リズムにより、しかも複合によりアクセントを強めるものが多く、動きは多様化している。また、これらのリズムは、前回までの結果と同様、その大半は音楽に見られないものであり、種類が多く、音楽との比較において次のことがたしかめられた。

① 休符の位置による差

動きにおいては、パターンの終りに休符があるものが多く、(♪ ♪ ♪ ♪ ♪) 音楽にはあまり見られない。これは、動きでは、シンコペーションによりアクセントをつくり、さらに強めるためにそのポーズのまま止まると言う手法のためである。

② シンコペーションの位置による差

動きでは、長い音符の次にシンコペーションのあるもの (♪ ♪ ♪) が多いが、音楽には見られない。これは、大きく十分な身体運動により長くひっぱりることにより生じるリズムであり、動きの特性と考えられる。

③ ①および②の特性を同時に含んだもの

例 (♪ ♪ ♪) これは、とびこんでポーズ、などである。

(6) 複合の様相

動きのリズムにおける年令別複合の様相は、前回(研究紀要第16号)と全く同様な結果が得られた。すなわち、単純な形から複雑な形、また、動きやリズムの要素の配列から結合へと変容する様相がたしかめられた。

(7) 動きの考察

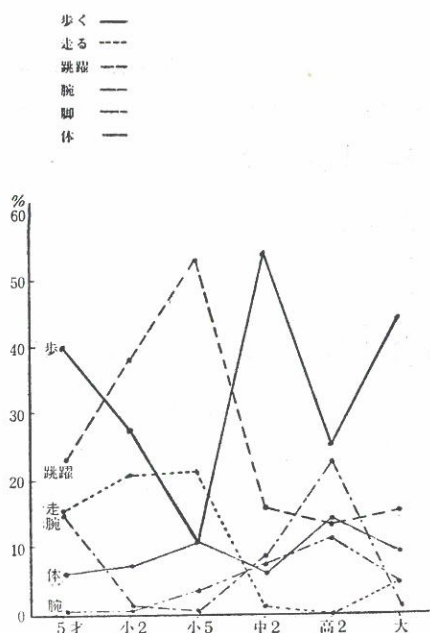
テスト結果を分析して得た動きについて、第3表の項目に分類し考察した。その結果、種目の現われ方や、種目ごとの頻数は、年令により異なった傾向が見られ、また、同一種目においても、動き方の様相が発達段階により変容する過程を得ることができた。次に年令別に考察を進める。

5才、種類が大変少ないなかで、ウォークがもっとも多く、腕で拍子を取りながら細かくウォーク (脚腕) が目立つ。次が跳躍で、このうち、両足とびが多く、ランニング、腕の動きがこれに続き、胴体の動きは側屈のみに限られる。

小2、分類の上では、5才に加えてターンが増える。5才において上位に見られたウォークが減り、また、腕の動きが急に減少して跳躍が増えていく。跳躍の種類のうち両足とびがもっとも多い。片足を軸にしたターンができはじめるが、脚のみの単独リズムである。体の動きの増加も見られるが、そのほとんどは前屈で、後そり、回旋が僅か見られる。

小5、5才、小2と次第に増加の曲線で伸びた跳躍が頂点を示し、全体の53.1%を占める。このうち、もっとも多いのは、とびこんで動きをする、両足とびと動き、等動きの組み合わせによる

第3図 動きの発達曲線



ものが多い。また、僅かであるが、動きの静止によるポーズがこの年令から見られる。

中2, 各分類に多様な動きで見られるが、ウォークがもっとも多く、54%を占める。これらは、腕の運動をしながらウォークが多い。また、5才においてすり足、小2, 小5においてつま先歩きの形で成長してきたフォローが、完全な姿でこの期から見られる。小5でピークを見せた跳躍は15.6%に、ランニングも小5の21.1%から1.3%に減少し、しかし、ホップ、2拍子ふみかえバランスなど、動きの種類が多様になっている。運動における身体の部位も、膝屈伸、脚上挙等、脚の動きが安定してできる。

高2, ランニングが消滅し、腕の動きが各年令に比してもっとも多い。これは、優美に腕を流す動きや、上挙、回旋等である。また、ポーズ、脚、体の運動も多様な種類で、重心支持が高度にコントロールできるようになる。

高2, ランニングが消滅し、腕の動きが各年令に比してもっとも多い。これは、優美に腕を流す動きや、上挙、回旋等である。また、ポーズ、脚、体の運動も多様な種類で、重心支持が高度にコントロールできるようになる。

大学, 多様な動きの種類による複合の形で見られる。分類中頻数が多いのはウォークであり、このうち、フォローがもっとも多い。次が跳躍、およびターンで、ボルカ、ホップ、各種の高度なジャンプ、ジャンプターン等が見られる。また、緊張、解緊による運動の交代性が見られる。

これらのことから、動きの発達は、幼児において単独リズムによるウォークから出発し、小5をピークに単独リズムによる跳躍に発達する。そして、中2において異なった種の跳躍に脱皮の姿を見せ、再び複雑化されたウォークが増し、この期から片脚支持の動きが安定してできるようになる。これは、生理的身体発達に応じた自然発生的リズムによる動きが、小2, 小5の時期まで続き、中学から自己表現に向かって生理的リズムから脱皮しつつ多様な動きにより自己変革を試みる転換期と思われる。さらに高校、大学と進むにつれて、重心支持も、高度にコントロールができ、単純から複雑に、そして、多様な動きの中からの精選による深化が認められる。

第3表 動きの分類別集計結果

年令 分類	5才		小2		小5		中2		高2		大		計	
	f	%	f	%	f	%	f	%	f	%	f	%	f	%
歩く	230	40.5	300	27.5	115	10.4	632	54.0	316	25.1	518	44.2	2111	33.2
走る	86	15.1	227	20.8	232	21.1	15	1.3	0	0	50	4.3	610	9.6
跳躍	130	22.9	416	38.1	585	53.1	183	15.6	163	13.0	184	15.7	1661	26.1
ポーズ	0	0	0	0	8	0.7	9	0.8	90	7.1	73	6.2	180	2.8
腕の動き	83	14.6	18	1.6	9	0.8	98	8.4	293	23.2	20	1.7	521	8.2
足の動き	5	0.9	7	0.6	37	3.4	83	7.1	141	11.2	55	4.7	328	5.2
体の動き	34	6.0	79	7.2	112	10.2	70	6.0	177	14.0	110	9.4	582	9.1
ターン	0	0	45	4.1	3	0.3	79	6.8	63	5.0	161	13.7	351	5.5
首の動き	0	0	0	0	0	0	1	0.1	18	1.4	3	0.3	22	0.3
計	568	100	1092	100	1101	100	1170	100	1261	100	1174	100	6366	100

Ⅳ ま と め

以上の結果から、刺激反応テストの範囲において、動きのリズムの発達過程の様相を次の点についてとらえることができた。

(1) 刺激リズムの質が異なったことによるリズム反応の変化は、主として休符の位置によるものである。

(2) 各年令に高い頻数で位置するリズムは、刺激が異なってもなおかつ、前回と同様なリズムであり、刺激反応テストの範囲において年令別に定着している動きのリズムがたしかめられ、その発達過程の様相が得られた。

(3) 動きのリズムにおけるアクセントのつけ方について、発達段階による低次から高次へ移行する過程の様相が得られた。

(4) シンコーションのリズムについて、動きの特性として、音楽の形と異なっており、その相違の一端が得られた。

(5) 動きのリズムを構成する身体各部の複合のされ方においては、単純から複雑に、配列から結合への変容の様相がたしかめられた。

(6) 動きの構造については、動きのリズム発生の裏付けと思われる発達過程が得られた。すなわち、未分化な幼児においては、刺激に対する束縛と、技術の矛盾や生理的リズムのなかで、ウォークを基とし、成長発達とともに変容する。そして、小学期に脱皮の時期を持ちつつ消滅、あるいは移行の形をとり、年令が進むにしたがい、粗協応から精緻協応へ、また、条件変動に際しての動作の安定化へと発展する様相が捉えられた。

以上、刺激反応テストの範囲において、動きのリズム、および身体運動について発達の変容過程を得ることができた。これらのことから、舞踊におけるリズムや動きの発達は、種類によってそれぞれ異なった曲線により、交錯しつつ成長すると思われる。しかし、小5～中学の頃を境として急速に変化し、この期に身体運動における条件変動に対しての定着、および適応の能力の伸び、また、美意識の深化が見られるようである。さらに、他の要因についての発達の段階をも究めつつ、動きのリズムとの関連において究明し、動きのリズムの体系化に接近したいと考える。

(この論文は、昭和47年10月1日、日本体育学会第23回大会において口頭発表したものを、さらにその後の考察に基づき整理したものである。)

参 考 文 献

- 松本千代栄; 舞踊美の探究 (1957)
SUSANNE K. LANGER; Problems of Art (1957)
LUDWIG KLAGES; リズムの本質 (1971)
小林信次; 舞踊美学 (1963)
ドリス、ハンフリー; 創作ダンスの技法 (1966)
岡山県立短期大学研究紀要 第13号
岡山県立短期大学研究紀要 第14号
岡山県立短期大学研究紀要 第16号
体育学研究 第13巻第5号 日本体育学会
体育学研究 第14巻第5号 日本体育学会
日本体育学会 第22回大会号 日本体育学会
日本体育学会 第23回大会号 日本体育学会

表2-5 動物のり文の身計結果

分類	種類数, 頭数, %	5才		小2		小5		中2		高2		大		計										
		K	F	%	K	F	%	K	F	%	K	F	%	K	F	%								
イ	より長い	a	86	17.0	5	54	5.3	3	45	4.0	2	15	1.3	9	173	13.8	11	96	8.6	12	597	9.7		
		b	145	28.7	1	114	11.2	1	11	1.0	2	15	1.3	2	44	3.5	6	111	10.0	6	444	7.1		
		c	2	0.4	2	7	0.7	2	10	0.9	1	1	0.1	0	0	0	3	2	0.2	6	22	0.4		
		d	0	0	0	1	0.1	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0.02	
		計	147	29.1	4	122	12.0	3	21	1.9	3	16	1.4	2	44	3.5	9	113	10.2	12	462	7.5		
		ロ	より長い	a	84	16.6	6	90	6.9	12	231	20.5	20	371	31.9	20	432	34.4	21	235	21.1	25	1423	23.0
				b	18	3.6	17	207	20.3	18	261	23.1	21	115	9.9	18	116	9.2	36	204	18.3	55	921	14.9
				c	4	0.8	8	48	4.7	3	11	1.0	6	26	2.2	2	2	0.2	1	1	0.1	15	92	1.5
				d	0	0	1	5	0.5	7	67	5.9	2	2	0.2	3	3	0.2	2	14	1.3	12	91	1.5
				計	106	21.2	32	352	34.6	40	356	31.6	49	214	18.3	41	462	37.1	75	559	50.4	107	1525	24.6
ハ	より短い			a	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
				b	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
				c	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
				d	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
				計	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
		ニ	より長い	a	22	4.4	26	260	25.5	30	357	31.6	29	143	12.3	23	121	9.6	39	219	19.7	84	1122	18.1
				b	0	0	1	3	0.3	2	14	1.2	8	18	1.5	4	8	0.6	11	41	3.7	18	84	1.4
				c	0	0	0	0	0	1	5	0.4	0	0	0	1	1	0.1	0	0	0	2	6	0.1
				d	0	0	4	19	1.9	6	27	2.4	6	12	1.0	2	8	0.6	10	32	2.9	15	99	1.6
				計	22	4.4	31	308	30.3	39	399	35.6	45	213	18.4	31	159	12.5	64	396	35.6	127	1525	24.6
ホ	より短い			a	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
				b	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
				c	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
				d	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
				計	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
		ヘ	より短い	a	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
				b	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
				c	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
				d	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
				計	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
ト	より短い			a	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
				b	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
				c	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
				d	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
				計	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
		チ	より長い	a	17	50.5	58	1018	100	97	1128	100	102	1164	100	79	1257	100	134	1112	100	237	1683	100
				b	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
				c	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
				d	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
				計	17	50.5	58	1018	100	97	1128	100	102	1164	100	79	1257	100	134	1112	100	237	1683	100